

---

# 対魔拳法伝説 破邪の拳

烈火竜

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

対魔拳法伝説 破邪の拳

### 【Nコード】

N4965T

### 【作者名】

烈火竜

### 【あらすじ】

時は、戦国。

妖怪、戦乱により世は乱れる。 そんな世に、一人の少女が現れし時、世は大きく変わる！

## 始まり（前書き）

第二のオリジナルです。

## 始まり

静けさが漂う夜の森に、みすばらしい衣を身に纏う者が道を歩く。

「……妖気……」

その者の声は、若い女だった。

そんな若い女の前に3人の落武者が現れる。

よく見れば、屍だった。

「……成仏出来なかったのね」

落武者達は刀を抜く。

「……俺達を……成仏させろ!!」

落武者達は叫びながら襲ってくる。

一瞬の出来事だった。

若い女は襲ってきた落武者達を通り抜けた。

そして、

「ひでぶっ!!?」

「ぶへっ!!?」

「はぶっ!!?」

落武者達の頭が一度に破裂し、消滅してしまう。

「……我が『破邪の拳』で、迷わず成仏しなさい」

被っていた衣を外すと、長い黒髪で、瞳の色は金色の美しい少女だった。

この少女の正体はいつたい!?

続く。

始まり(後書き)

次回をお楽しみに。

謎の巫女 咲夜（前書き）

まずは、話の流れから始まります。

謎の巫女 咲夜

山奥の森で……、

「「うわっ!?!」」

山にやって来た2人の男が追われていた。

「「「あつきゃきゃきゃ!?!」」」

追いかけてきたのは、数匹の‘化け猿’だった。

「助けてくれ!?!」

必死で逃げようとするが、

「うきゃあ!?!」

目の前に巨大な大猿が木の上から飛び降りる。

「「うわっ!?!」」

「……死ね」

「「ぎゃあああああ!?!」」

大猿は鋭い爪で2人を斬り刻んで殺す。



\*

その後、化け猿達は斬り刻んだ2人の人肉を食べる。

「頭、うまいっす」

「やっぱり他の生き物の肉より、人間の肉はうまいっす」

化け猿達は大猿を『頭』としている。

「わしらのなあばりに入ったのは運のつきだ」

大猿も人肉を食べると、

「頭!!」

1匹の化け猿が駆け足でやって来る。

「どうした？」

「大変だ！ 副頭が！」

「何!？」

大猿はただ事ではないことに気づく。

\*

別の山奥で、たくさんの化け猿の死骸が転がっていた。

「弟よ！」

大猿は1匹の化け猿の死骸を抱えて泣き出す。

この化け猿が大猿の弟で、『副頭』を務めていた。

「くそ、誰がこんなことを!!！」

怒り狂う大猿は叫ぶ。

「……妙だぜ……」

1匹の化け猿は死骸を見て、気づく。

「何が妙なんだ？」

「良く見る」

他の化け猿に死骸を見せつける。

「……あつ……」

他の化け猿も気づく。

どの死骸も頭や腹などが破裂していた。

「なんだ、この死に方は？」

化け猿達は奇怪な死に方に恐怖する。

「おおーい、まだ息がある奴いるぜ！」

大猿と化け猿達は息のある奴のところへ駆け寄る。

「おい、誰に殺られた？ 誰が弟を殺した？」

息絶え絶えに語り出す。

「ち……乳の……無い……女……がべっ……！」

語り終わった後、頭が破裂する。

「……どういう意味だ？……」

大猿や化け猿達は啞然とする。

\*

とある小さな村。

荒れた畑に活気の無い村人しかいなかった。それは、この地を治める領主の厳しい取り立てを受けたばかりだからだ。

1人の男が駆け込んでくる。

「大変だ！ また妖怪が人を襲ったらしいぞ！」

活気の無い村人達はこのことには流石に驚き、駆け込んできた男に集まってくる。

「またか！？」

「ああつ、喰われた後の死体が二つあった！」

「これで何回目だよ！」

「……四回目だ……」

『四回目』と聞いて、恐怖する。

「……ご領主様は退治なさってくれぬのか？」

「無駄じゃ、妖怪退治するより戦に勝つことしか無い」

「酷い取り立てを止めてくれ言っても止めてくれなかったんだ。妖怪退治だって聞き入れてくれるかどうか……」

村人達は絶望する中、

「この狐め！」

村人の1人が1匹の子狐をわしづかみする。

「どうした？」

「聞いてくれ！ こいつ、家の乾し柿を喰いやがったんだ！」

力強く掴まれるので、仔狐は苦しがる。

しかし、鳴かなかった。

「今は乾し柿どころじゃないぞ！ 今は……」

「このガキ！」

「離してくれよ！」

別の村人が子供の襟を掴んでいた。

「はな”また、盗んだんか？」

子供は“はな”と呼ばれる。

「何にも喰ってねえんだよ。領主の家来になけなしの食い物を盗られたから！」

「こつちだって、おんなじなんだよ！」

互いに理由を自重し合う。

「くそ！！ 村は食い物不足で悩んでいるのに、妖怪に怯えなきやなんねえのかよ」

「二重の苦難に頭を悩ませる村人達。

「はなと狐はどうする?」

「また、和尚様にお灸を据えて貰うか」

「ええっ」

\*

村からかなり遠い地に小さな寺があった。  
はなと仔狐は縄で縛られ、村人の1人に連れてこられる。

「和尚様、またお願いします!」

村人は和尚を呼ぶ。  
すると、黒髪の巫女が寺から現れる。

この時、はなと仔狐は黒髪の巫女から放つ不思議な魅力に目を奪われる。

「あ、あれ? 寺に巫女さんいたっけ?」

村人は首をかしげる。

「いかながなされた?」

寺の和尚が出てくる。

「ああつ、和尚様。はるの奴がまた盗みを働きました。お灸を据えて下さい。この仔狐は、その見返りに」

「仏に仕えるものは、肉は食わん。しかし、お灸は据えてやろう」

「ありがとうございます。それで、その巫女さんは？」

「ああつ、行き倒れになったところを助けたのじゃ」

黒髪の巫女は頭を下げる。

村人も頭を下げる。

「そんじゃ、お願いします」

「あい、わかった」

はなと仔狐を置いて、村人は帰ってゆく。

はなと仔狐は黒髪の巫女をじっと見つめるのだった。

\*

その夜、はなと仔狐は和尚と黒髪の巫女と一緒に飯を食べる。

しかし、豆粒だけだった。

「……粥は無いの？」

「米は無いから、作れぬ」

はなは豆粒を一口で食べる。

「……米はご領主の家来に持っていかれた？」

「察しが良いな」

「おいおい、盗人のあたしだけじゃなく、仏に仕えるところにまで  
食い物を奪うのかよ」

はなは呆れてしまう。

黒髪の巫女はずっと仔狐を見る。

仔狐はずっと警戒し、豆粒を食べようとしない。

「……あの仔狐、さっきから警戒している」

黒髪の巫女が初めて口を開いたので、はなは少し驚く。

「……こいつ、人間が嫌いなんだよ」

「何で？」

「こいつの母狐と兄弟を目の前で殺されたんだ」



「……見ていたの」

「……ううん、駆けつけた時には既に殺されていた」

「何で殺したのが人間だって分かるの？」

「他の生き物に食い殺された跡は無かった。……なりより、あたしが近づいた時、怯えて噛みつきやがったから」

「……なるほど」

「その上、鳴かなくなっただ」

はなの説明で納得した後、黒髪の巫女は仔狐に近づく。

「おいおい、何するんだよ？」

仔狐は警戒する。

「……大丈夫よ……」

黒髪の巫女の優しい声に警戒を緩める。

そして、仔狐の顔に手を当てる。

「……ふん！」

黒髪の巫女は指を優しく押した瞬間、仔狐は一瞬衝撃を受ける。

「な、何したんだ？」

はなはおそるおそる尋ねる。

「声の出るおまじない」

しばらく経つと。

「……にゃあ。 にゃあ」

仔狐は鳴き始める。

はなと和尚は驚く。

「な、鳴いた！？ 今まで鳴いたこと無かったのに!？」

仔狐は黒髪の巫女に擦り寄る。

黒髪の巫女は抱き抱えると、仔狐は頬を舐める。

「あ、あんたは一体何者なんだよ？」

「私の名は咲夜「さくや」」

「……咲夜……もしや」

和尚は咲夜の名を聞き、何かを確信する。

\*

「はあ」

はなは寺の湯船に入浴する。

「咲夜、アイツは何者なんだ」

咲夜が何者なのか気になっていた。  
そんな時、咲夜が入ってくる。

「うっ」

咲夜の方に振り向いてみて、驚愕した。

咲夜の両乳房が無かった。 両乳房の代わりにえぐられた痕があった。

「……あつ、驚いた？」

「驚くに決まってるだろ！ なんだよ、その胸!？」

「えぐられた」

「見りゃあわかるよ！ もしかして、妖怪にやられたのか？」

「……妖怪より、手強い奴によ」

「妖怪より、手強い奴？」

はなは首をかしげる。

「私にあんたが、女ってことに驚いた」

「わ、悪かったな、女に見えなくて！」

はなは顔を赤くして怒る。

そんなはなを気にすることなく、入浴する。

しばらく経ってから、咲夜は口を開く。

「……盗みを止めて、女らしくしたら」

「余計なお世話だ」

「和尚から聞いたけど、流れ者なんだって？」

はなは頷く

「村にやって来ては、盗みを働いて、此処へお灸を据えられている  
繰り返したそうね」

「だったらなんだよ」

「盗みを辞めて、何処かの屋敷か店に奉公すれば？」

「無理無理。身寄りの無い奴を奉公させるお人好しなんか無いよ」

咲夜は黙ってはなのお話を聞く。

「今は戦と妖怪に怯えるご時世。苦しむのは力の無い人間ばかり。」

あたしには力が無いから、こつやって知恵を働かせて盗みをする  
しか無いんだよ」

「つて、失敗してるじゃない」

「ほつとけ!」

「……けど、本当に悲しいご時世ね。あんたみたいな子供が盗み  
を働いてしまうほど乱れるなんて」

咲夜は悲しい顔になる。

「……同情するの?」

「別に。盗みをするのは決して良いことじゃない。奪われた者  
の気持ちを考えたことはある?」

「いちいち考えられるかよ」

咲夜はため息を吐いた後、湯船から上がる。

「……これを理解すれば、あんたは盗人からまともな奴に変わる」

「……簡単に言つなよ」

「言えるわ」

「何で?」

「……あんたは根は悪い奴じゃないから」

これを聞いたはなは顔を赤くする。  
その間に咲夜は出ていく。

\*

小さな村から離れた場所。      あの大猿と化け猿達が集まっていた。

「ぐるる〜。      乳の無い女を探して八つ裂きだ！」

大猿は弟の仇を取る為に村を襲撃するつもりだった。

次回に続く

謎の巫女 咲夜（後書き）

次回は戦闘描写です。

妖怪を殺す拳法 その名は『破邪神拳』（前書き）

遂に戦闘描写を書きました。



妖怪を殺す拳法 その名は『破邪神拳』

あの喋れるようになった仔狐は森の中へとやって来た。

「……クウーン」

仔狐は一瞬に人間の子供になる。

「……あ、ああっ……」

仔狐は喋ってみる。

「人間になっても喋れる。……あんな良い人間もいるんだ」

仔狐は咲夜のことを思い出す。

咲夜のことを考えながら、仔狐は走り出す。

仔狐は小さな洞窟に入り、あるものを探していた。

「あつた！」

見つけたのは、死んだ鼠の死骸だった。

「咲夜は、お腹空かしているから、これをあげよう」

仔狐はこの鼠の死骸を食べさせようと考えた。

仔狐は洞窟から出ようとした途端。

「あきやきや！」

「あっ!?!」

数匹の化け猿達が、仔狐を取り囲む。

「この子供、使えそうだな」

突如、化け猿達は仔狐に飛び掛かる。

「うわーっ!?!」

仔狐はあっさりと捕まってしまう。

\*

寺の縁側で、湯上がりはなが転がりながら夜空を眺めていた。  
はなは風呂場での咲夜の話进行出していた。

「あんたは、根は悪い奴じゃない、か。……って、現実はそのは  
いかないんだよ」

ため息を吐くはなだった。

すると、噂の咲夜が歩いてくる。

「……はな」

「何？」

「あの仔狐、知らない？」

「えっ？ ……そういえば……」

はなも、いつの間にか仔狐がいなくなっていたことに気付く。

「どこに行ったのかな？」

「……山に行つてなきゃいいけど」

心配そうに呟く。

「そりゃないよ。あの山は化け猿達がうようよいるんだよ。中  
でも、大猿はとても凶暴な奴なんだから」

「そう」

はなは、咲夜の顔をじつと見ていた。

「何？」

「あなたは一体何者なんだ？」

咲夜は黙って聞く。

「あの不思議な技といい、えぐられた乳房。とても普通の奴じゃ

ないよ  
「

はなの問い掛けに咲夜は黙り込む。

すると、和尚が咲夜の元へ歩み寄る。

「和尚  
「

「……もしや、お主は  
「

「和尚!!」  
「

和尚が訊ねようとした所、村人が慌ててやって来る。

「どづした?」  
「

「村に、村に妖怪が!!」  
「

「何!?!」  
「

\*

「きゃあああああああ!!」  
「

「うわあああああああ!!」  
「

村は化け猿達に襲われていた。

男は八つ裂きにされ、女は肌着をひん剥き、胸を覗きこむ。

「こいつじゃねえ!」

「こいつも違う!」

猿達は『乳房の無い女』を捜していたのだ。

化け猿達を率いる大猿は仔狐を持ち上げながら叫ぶ。

「乳房の無い女を差し出せ!! さもなくば、この子供殺す!!」

「うう」

仔狐は頭を掴まれ痛がる。

「乳房の無い女?」

「なんの話だ?」

大猿の要求に村人達には検討がつかなかった。

そこへ、和尚、はな、そして咲夜がやって来る。

「和尚!」

村人達は和尚の元へ駆け付ける。

「あの化け猿達は何しに？」

「それが、訳のわからないことを要求するんだ？」

「訳のわからないこと？」

「『乳房の無い女を差し出せ』って、言うんだよ」

これを聞いたはなが驚く。

(それって……)

咲夜に目をやるはな。

当の咲夜は大猿が持ち上げている仔狐を見る。  
仔狐も咲夜に気付く。

(あの子は！)

咲夜は前に出て、大猿の元へ歩き出す。

「お、おい！」

はなは制するが、咲夜は止まらずに行く。

化け猿達は咲夜に気付く。

仔狐も咲夜に気付く。

「咲夜！！ 来ちゃ駄目！！」

咲夜を止める。

「えっ？　なんであいつ、咲夜の名前を知っているだ？」

仔狐に気づいていないはなは、首を傾げる。

化け猿達は咲夜に近づく。

「おい、なんだお前？」

「喰い殺すぞ？」

「そこを退きなさい。　さもないと、死ぬわよ」

咲夜は指を鳴らしながら、脅す。

「あんだと！？」

「喰い殺してやる！」

化け猿達は爪をたてながら、咲夜に飛び掛かる。

その飛び掛かる瞬間、咲夜は大きく回し蹴りで、化け猿達を蹴り飛ばす。

「」「あきやきや！」「」

化け猿達が倒れる。

はなや和尚らは驚く。

咲夜は再び歩き出す。

すると、倒れていた化け猿達は起きあがる。

「いつてっ…」

「よくもやりやがったな！」

「もう容赦しねえ！」

怒った化け猿達は咲夜に襲い掛かろうとした時。

「あぎゃー！」

「いぎゃー！」

「うぎゃー！」

突如、化け猿達の頭が膨らみ始める。

はなや和尚らはさらに驚く。

そして、頭が破裂した化け猿達は絶命する。

「な、何者なんだ、あいつ!？」

はなは驚愕する。

「は、破邪神拳　!！」

あの光景を見た和尚は、そう口にする。



咲夜は大猿の前に立ち、羽織を脱ぐ。そして、えぐられた乳房を見せ付ける。

「私とその女よ。その子を離せ」

「お前か、俺の弟を殺ったの!? こんな子供「ガキ」、捻り殺してやら!」

「うう!」

大猿は弟を殺した咲夜に怒り、仔狐を殺そうとする。

「はあああああああ!」

突如、雄叫びを挙げた咲夜。咲夜の身体にとてつもない覇気が覆い、髪の色が紅く変色した。

捻り殺そうとする大猿は驚き、一瞬止まる。

「あつたたたたたたた、終わった!」

咲夜は目にも止まらない速さで、大猿の額、頬、首、胸などの身体の一部に拳を打ち続け、吹き飛ばす。

「あああああああ!」

仔狐は落ちそうになるが、咲夜は受け止める。

「破邪百裂拳」

大猿は倒れる。

(その昔、ある国の究極暗殺拳と、この国の対魔術を組み合わせた拳法 破邪神拳。妖怪の秘孔や悪霊の気の流れに、靈力を打ち込み、表面の破壊より、むしろ内部から破壊するという。使えるのは、優れた格闘の素質と強大な靈力を持つ巫女のみ)

和尚は解説する。

大猿はゆっくりと起き上がる。

「なんだ、てめえの拳なんざ、効きやしねえ！ぶっ殺してやる！」

大猿は咲夜は殺そうとする。

「お前はもう死んでいる」

「何？……ににに、にこっ、さるぐんだん！！？」

大猿の頭や腹部等が破裂して、生き絶える。

「ああっ、すげえ……」

あまりにも残酷な光景に、思わず腰を抜かすはな。村人達も同様であった。

\*

「おゝい、待てよ」

村を去ろうとする咲夜を呼び止めるはな。しかし、咲夜は止まらなかった。

「お礼は要らないのかよ？ ……そうだ、アイツに付いていけば、食い物にありつけそうだな。おゝい、待ってくれよ！」

はなは咲夜に付いていく。

和尚と村人達は咲夜を静かに見送る。

「和尚、あの人（咲夜）はいつたい？」

「……辛く険しい破邪の道を突き進む巫女……。その先にあるものは何かは、わしにもわからん」

和尚は咲夜を見て、大きな宿命を持っていることを悟る。

しばらく歩く咲夜とはなの前に、仔狐が現れる。

「あ、仔狐」

仔狐はすぐさま人間になる。

「わっ、あの時の子供!？」

はなは、人間になつた仔狐を見て驚く。

「……咲夜……」

「何？」

「……二度も助けってくれありがとう……」

「気にしなくても良い」

咲夜は立ち去ろうとすると、仔狐は咲夜の裾を掴む。

「……付いていっても良い?……僕、一人ぼっちなんだ」

しばらく沈黙する。

「好きにきなさい」

仔狐は喜ぶ。

「ありがとう! 僕は“天”」

「行こうか、天、はな」

「えっ、付いてきても良いの?」

「その為に来たんでしょ?」

咲夜の言葉に、喜ぶはな。

「よっしゃ。私、咲夜の子分だ」

「僕も子分だ！」

咲夜はクスツと笑う。

こうして咲夜に子分が二人できた。

続く。

妖怪を殺す拳法 その名は『破邪神拳』（後書き）

思い切り『北斗の拳』の一話ですよね。

ですが、キャラクターと設定は違います。（多分）

次は気をつけますね。

## 登場人物（前書き）

登場人物の紹介ですので、短いです。

## 登場人物

前もって説明しておきます。

ICV「イメージキャラクターボイス」とは、イメージ的な声（声優）の略です

咲夜

ICV：木下あゆ美「『遊戯王 5D's』十六夜アキ」

プロフィール

対魔拳法破邪神拳の伝承巫女。

弱き者や幼い子供にはとても優しい。その反面、傲慢な者や力や権力でものをいわせる者には容赦なく痛めつける。特に、外道な人間には悪霊や悪の妖怪と同様に非情に抹殺する。

普段は無表情で無口だが、甘い物を食べる時は笑顔になる。

《破邪神拳》

暗殺拳と対魔術を組み合わせた拳法。

秘孔に霊力を送り込み、内部から破壊する。これは妖怪・妖魔だけではなく人間にも通用する。

はな

ICV：日笠陽子「『生徒会 役員共』天堂シノ」

こそ泥を働いていた女の子。しかし、咲夜と出会って、付いていけば食い物にありつけると考えでついていく。

盗みで培った知識と持ち前の運動神経で乗り越えている。



天

ICV：早見沙織「『そらのおとしもの』イカロス」

プロフィール

親と兄弟を人間に殺されたショックで、声を失う仔狐。  
雄。

性別は

しかし、咲夜が秘孔を付いたおかげで声を取り戻す。  
夜になついで、旅に同行する。

以後、咲

微弱ながら狐火を使える。

終わり

**登場人物（後書き）**

CVにこだわりました。

悪は妖怪だけとは限らない！ この世は、喰うか喰われるかの戦国！（前書き）

今回は妖怪は出ません。

悪は妖怪だけとは限らない！ この世は、喰うか喰われるかの戦国！

咲夜と、子分になったはなと天は喉かな街道を歩いていた。

「腹減ったな〜」

「僕も」

2人の子分は腹を空かせていた。

「だらしないわね。 まだ一日しか経っていないじゃない」

「一日も食べなきゃ、腹を空かすのは当たり前だよ！」

はなはツツコミを入れる。

「そう？ 私なら、一週間ぐらいは持つわよ」

「凄いね」

「って、あんたと一緒にするなよ！」

天は驚くが、はなはツツコミ(二度目)を入れる。

「ああっ、腹減ったよ〜！」

はなは駄々をこねる。

「……あっ」

「どうしたの」

「あれ」

天は、向こうの先にある茶店を見つける。

「茶店だ！ 何か食べようよ」

咲夜にねだる。

「でも、あそこって、お金というものがないと、美味しいものは食べれないよね。お母さんが言ってた」

「その通りよ。残念だけど、お金は持ってないの。だから」

すると、咲夜は鼻をならし始める。

「どうしたの？」

すると、天も鼻をならし始める。

「なんか、血の匂いがする」

「血の匂い？」

「天の言う通りよ」

はなも鼻をならすが、嗅げなかった。

「私の嗅覚は犬並みなのよ。 天は狐だから、嗅覚も犬並みよ」

「えっ、狐って、犬なの？」

「なんだと思ったの？」

「狐は狐だろ」

「……まっ、いいか」

説明をするのが面倒くさくなり、さっさと茶店へ向かう咲夜とは  
なと天。

「いらっしやい」

店主らしき男がお茶を煎れ始める。

と同時に薬を混ぜ込む。

「さあさあ、どうぞぞ」

咲夜にお茶を差し出す。

「いただき」

はながお茶を飲もうとすると、咲夜が止める。

「どうかしました」

「あんたが飲みなさい」

「えっ!？」

「なんか匂うのよ。大丈夫かどうか飲んでみて」

「だ、大丈夫ですよ。新しく仕入れた茶でして」

「なら、飲んでも大丈夫でしょ？」

咲夜はお茶を片手で持ち、片手で店主の襟を持つ。

「ひっ!」

そして、無理やりお茶を飲ませる。

「がぼぼぼ……ぐはっ!」

店主は血を吐きながら倒れ、息絶える。

「やっぱり毒か。……出てきなさい、隠れているのはわかってい  
るわ」

「ひっひっひ」

茶店から刀を持った野武士達が出てくる。

さらに茂みからも野武士達が現れる。

はなと天は咲夜のそばに寄り添う。

「よく見破った。だが、大人しく飲んでいれば、楽に死ねたのにな」

咲夜に刀を向けて、脅しかける。

「初めから、毒を盛る必要は無いんじゃない？」

野武士達は黙る。

「狙いは私ね？」

「誰に頼まれた？」

「殺れ！」

野武士達は咲夜に襲い掛かる。

素早く咲夜は、はなと天を担いで高く跳ぶ。

離れた場所へ着地し、2人を降ろす。

「咲夜」

「大丈夫」

「破邪神拳でやっつけるのか？ あいつらは人間だぜ」

「確かに破邪神拳は妖怪を殺す拳法だけど、通用する。何故なら





野武士達は咲夜に襲い掛かる。

「うりゃあ！」

たたっ斬ろうとするが。

「アチヨー！」

「ぐへっ！」

体を避けて、横顔を殴り飛ばす。

「てりゃ！」

槍で串指しにしようとするが。

「ハッ！」

「ぐはっ！」

脇の間を開けて突きを避けて、顔に一撃を打つ。

「ぐおっ！」

鉄棒で薙ぎ払おうとする。

「アツタタタタタ、オワッタ！」

「ぐおっ！」

目に留まらない速さで腹の部分を連続で蹴って、吹き飛ばす。

咲夜の実力を目の当たりした野武士達は驚愕した。

「やっぱ、すげえ！」

「咲夜！」

はたと天も咲夜の実力に驚くしかなかった。

「や、やりやがったな」

倒れた野武士達が立ち上がり、やり返そうとする。

「無駄だ。お前達は死んでいる」

「ふざけんな、勝負はまだこれか……らっらっ！？」

刀を持つ野武士は頭が膨らむ。

「どうし……たったっ！」

槍を持つ野武士は顔が膨らむ。

「うそ……おおん！」

鉄棒を持つ野武士は腹が膨らむ。

そして、破裂して死ぬ。

「他の野武士達は恐怖する。」

「まだやる？」

「い、一斉にかかれ！」

武器を構えた野武士達は、一斉に咲夜に襲い掛かる。

「アチヨー！ ワチャー！ アツタタタタタタタ、オワッタ！」

咲夜は、野武士達の攻撃を僅かな動きを生かしながら避け、素早い突きや蹴り技で圧倒する。

「」「あべしっ！」「」

攻撃を受けた野武士達の急所部分が破裂し、死ぬ。

「ああっ……」

残った野武士は咲夜の強さに恐怖する。

「残ったのは、お前だけだな。さて、誰に雇われたか、聞かせてもらっかな」

咲夜は野武士に近づくと。

「」「っわっ！」「」

「はっ！」「」

はなと天の叫びに気付き、咲夜は振り向くと、はなと天が別の野武士に捕まっていた。

「動くな！ 動けばこいつの命はねえぜ」

はなと天を人質にし、咲夜を脅す。

「よくやったぜ」

形勢逆転したので、強気になる。

「おうおう、よくも仲間を変な技で殺してくれたな。 たっぷり礼をしてやるぜ、ペッ！」

咲夜の頬に唾を掛ける。

「おっと、抵抗するなよ。 抵抗すりゃ、あのガキ共は皆殺しだ」

刀で咲夜の身体をつついてくる。

「おい、どうした？ なんか言えや。 あの子達を助けてって、叫ぶよ。 みつともない顔をさらけ出せよ」

咲夜の口が開く。

「ちょっと……汚い顔を向けるな」

「な、なんだと!?!」

思わない言葉を吐いたので、咲夜を斬ろうとすると。

「アツタタタタタタ……」

「ぶべべべべべべ……」

咲夜は目に見えぬ速さで野武士の顔を連続で殴り続けた。

これには、はなと天は呆気にとられてしまう。

「オワッター！」

「ぐへっ！！」

最後の一発を喰らった野武士は茶店まで吹き飛んでしまう。

「たばっ！！」

跡形もなく爆死してしまい、茶店の中は血まみれになってしまう。

咲夜は頬の唾を払った後、はなと天を人質にとっている野武士に近づいていく。

野武士は怯えて、後退りする。

「……その子達を殺してみろ。その時はあんたを殺す！」

「ひっ！？」

「その子達を解放して助かるか、その子達を殺して死ぬか、どちらを選ぶ？」

「か、解放します!」

野武士は、はたと天を解き放してすぐに逃走してしまふ。

「……咲夜!」

天は泣きながら咲夜に抱き付く。

「……ごめんね」

咲夜は、安心させるように天の頭を撫でる。

「咲夜! 子分を見捨てる気かよ!」

はなは、咲夜の行為に対して怒る。

「見捨ててないって。こつやって助けたじゃない」

「けど」

文句を言いかけると、咲夜に鼻の先を押さえられる。

「子分は親分を信じなさいって」

「う、うん……」

咲夜の笑顔を見て、黙り込む。

「それより……ごめんね」

「「えっ?」「」

咲夜の突然の謝罪に驚く。

「私一人でやっていれば、二人に怖い目に合わなかった」

「も、もう良いよう」

「済んだことだし」

「……そう」

2人の返事を聞き、咲夜は微笑むのだった。

その後、咲夜達は再び歩き出す。

「ねえ、咲夜」

はなが訊ねる。

「何?」

「破邪神拳の元になった暗殺拳法って、すげえな。なんて暗殺拳法なんだ?」

「無敵の北斗神拳」

「北斗……神拳?」



「中国という国に伝わる伝説の暗殺拳法」

「ふーん」

「咲夜」

今度は天が訊ねる。

「何？」

「あの野武士達は、何で咲夜を殺そうとしたのかな？」

「……もしかしたら……」

「心当たりあるの？」

「あの野武士は、ただの捨て駒よ」

「「捨て駒？」」

2人は首を傾げる。

「私が衰えていないかのね」

咲夜の言葉の意味を今一つ理解できない2人であった。

（私は死ねない。必ず、あなたから兄さんを取り戻す！）

咲夜はある決意を固めるのだった。

咲夜の決意の意味とは一体？

続く

悪は妖怪だけとは限らない！ この世は、喰うか喰われるかの戦国！（後書き）

今回の戦闘描写はいかがでしたか？ 感想か指摘を待っています。

妖牙粉碎拳（前書き）

短いです。

## 妖牙粉碎拳

咲夜達がお堂の前を通り越そうとした時、お堂から物音が聞こえてきた。

「うん、なんか音がしなかった？」

「ええ、したわ」

咲夜は辺りを見渡し、お堂に気付き、扉を開くと、縛られた少女がいた。

「どうしたの？」

咲夜は縄をほどくと、少女は逃げ出した。

「なんでい、お礼も言わないで」

「あの子、悪い奴に捕まったのかな」

「それを助けたのは、あたしらなのに」

「きゃあああああああああ！！」

はながぶつくさ文句を言うと、逃げた少女の叫びが森から響く。

咲夜はすぐさま森に入っていた。

\*

「ああっ」

妖怪“大百足”に追い詰められた少女は怯えて縮こまってしまふ。

「きゃきゃきゃ、追い付いたでえ。ほな、いただきま〜す」

大百足が少女に襲い掛かろうとした時、真上から影が現れ、大百足の頭を踏みつけた。

「ぎゃあ!」

影の正体は咲夜だった。

少女は突然現れた咲夜に驚いた。

「な、なんや、お前は!？」

「虫けらに名乗る名は無い」

「なんやと、こら!」

怒った大百足では咲夜を振り落とそうと頭を揺らすと、咲夜は宙返りして、少女の前に着地した。

「ガキの代わりに貴様から喰ったる!」

大百足は口を開け牙を広げて、咲夜に襲い掛かった。  
咲夜は襲い掛かる大百足の牙を容易く搦んだ。

「な、何!？」

「気づかない、顎の力が弱っていることに？」

大百足の口は開きっぱなしになっていた。

「さつき、秘孔「頬内」を突かせた。お前の顎の力は弱まった。  
だからもう噛めない」

「そ、そんな……」

咲夜はそのまま搦む手に力を入れると大百足の牙にヒビが入り、  
粉々に砕けた。

「ぎゃあああああああ!！」

《妖牙粉碎拳》

牙を壊された大百足は激しく痛がった。

「し、絞め殺」

大百足の頭部は膨れ上がった。

「妖牙粉碎拳は相手の牙を破壊するだけでなく、牙の神経から頭  
の神経に霊力を送り込む。お前も死んでいる」

「歯が抜けた〜!!」

大百足の頭は破裂し、死骸はばたきと倒れた。

少女は驚きのあまりに腰を抜かした。

「大丈夫？」

「は、はい」

「咲夜〜」

はなと天が急いで咲夜に駆け寄ってくる。

「流石、咲夜だ」

はなは大百足の死骸を見て、感心した。

すると、茂みから音がした。

「誰だ!？」

はなは怒鳴ると、茂みから農民風の男が出てきた。

「お父!」

「ひな!」

少女と男は抱き合った。



「無事だったな！」

「うん、この人に助けてくれたの」

“ひな”と呼ばれた少女は咲夜を指す。

「ありがとうございます！」

「あんたが親？ 災難だったな、子供が拐かされて」

はながそう言うが、ひなの父と、ひな本人は浮かない表情だった。

「……実は」

「いたぞ！」

声と共に、森の奥から農民達が現れた。

「うわ、これは……」

大百足の死骸を目にした農民達は驚愕した。

「いや、それより……」

農民達は大百足の死骸を後回しに、ひなと父親のところまで。

「鳥作、お前なんてことをしたんだ！」

「なんてことって、なんのこと？」

「さあ？」

父親は“鳥作”と呼ばれ、非難された。  
はなと天は、何故非難されているのか、わからなかった。

「すぐにひなをお堂に戻せ！」

「『お堂に戻せ！』って、まさか、この子「ひな」を縛って閉じ込めたのは、あんた達？」

驚いた咲夜は人々に訊ねた。

「そうだが……あんたは？」

「私が縄を解いたのよ」

これを聞いた人々は、今度は咲夜を睨み付けた。

「なんてことをしてくれた！」

「だから、なんてことって、なんのことだよ？」

状況が理解できないはなは怒って訊ねた。

「そいつ「ひな」を、差し出したんだ」

「差し出したって、誰に？」

「土地神様だよ」

「土地神様？」

咲夜とはなと天は揃って驚いた。

「……詳しいことを聞かせて貰おうかしら？」

「あなたに関係」

「言わないと、アレの二の舞になるよ」

はなは大百足の死骸を指した。

「アレの二の舞って……」

「これをやったのは、この咲夜だけ」

これを聞いた農民達は驚いた。

「そつだよな？」

はなはひなに訊ねた。

「は、はい、この人が化け物「大百足」をやっつけました」

ひなは見たことを証言した。

「咲夜の破邪神拳は、人間にだって通用するぜ」

農民達は咲夜を見て怯えると、1人の老人が現れた。

「長老」

ひなは老人を長老と呼んだ。

咲夜と長老が睨み合つと周りは黙って見守る。

「……村に来てくだされ。事情を説明しましょう」

こうして咲夜達は村へ招かれることになった。

次回に続く。

## 妖牙粉碎拳（後書き）

感想を下さうたら嬉しいです。

## 怪しき屋敷への招き（前書き）

さて、村の問題とは？

## 怪しき屋敷への招き

月明かりの静かな村。

この村は、咲夜達が助けたひなの村である。

村長の家に招かれた咲夜達は、村長から事情を聞かされる。

暗い居間で、いおりを囲んで、咲夜とはなと天は行儀良く正座をして、村長の話を聞いた。

「もう半年前のことになります。あまり豊かとは言えない畑がますます貧しくなるという異変が起こりました。我々は頭を悩ませ、ワシの家でどうしようかと話し合っていると、外から光輝くものが現れた」

「光輝くもの？」

「そのものは、土地神、と名乗った」

「土地神？」

『土地神』という言葉に、咲夜とはなと天は驚いた。

「土地神様は力が弱まった為に、大地まで弱くなった。力を蓄えるためには、子供の肉が必要だ、我がお堂へ差し出すのだ。とおっしゃった」

「おいおい、まさか言う通りに子供を差し出したのか？」

はなの問い掛けに村長は重く頷いた。

これに、はなと天は驚いた。

「……半年の間に、何人の子供が犠牲に？」

咲夜は厳しい目付きで村長に問い掛けた。

「……ひなで6人目です……」

「そ、そんな……」

6人と聞かされ、天は思わず言葉を出した。

「おいおい、あんた達は、心は痛まないのかよ！」

はなは怒って、村長を責めた。

「痛むに決まってるんだろ！」

突然の怒鳴り声は、村人の1人だった。  
その後ろには、他の村人達も控えていた。  
皆、はなを睨み付ける。

「うっ……」

はなは思わず、咲夜の後ろへと隠れてしまう。

「……息子を……息子を失った親の気持ちがあるか！」  
息子を失った父親である村人は涙を流す。

「私だって、辛かったよ」

「おらもだ」

「村の皆が生き残るためには……仕方がなかったんだ」  
控えていた村人達も泣き出した。

天は思わずもらい泣きしてしまう。

咲夜も村人達の悲しみを感じ取り、同情した。

「……よく考えてみて。このまま子供を捧げ続ければ、結局村は滅びるわよ」

この咲夜の言葉を聞き、村人達は気が付いた。  
確かに子供はこれから先を繋ぐ力を持っている。  
その子供がいなければ、村は滅びる。

「……あなたの言う通りじゃ……」

村長は咲夜の前で頭を下げた。

「お願いです！ 村を、村をお救い下さい！」

咲夜に懇願すると、村人達も頭を下げ始めた。

「お願いします！」

と頭を下げて懇願した。

村人達の必死の訴えを目の当たりにした咲夜は立ち上がり、  
「しばらく考えさせて」

と言って、村人達の間を通り抜けて外を出る。



\*

外に出た咲夜が最初に見たものは、村はずれで座り込むひなの姿だった。

咲夜は不思議に思い、歩いてひなのところへ行く。

ひなのいた所には、大きな石が6つほど置かれていた。

ひなはその石に拜んでいた。

「あ、咲夜さん」

「その石は？」

「……死んだ私の友達のお墓です……」

悲しく石を墓と説明した。

咲夜も膝を付いて拜んだ。

「……怖かった……」

ひなは悲しく語り始めると咲夜は静かに聞く。

「ふうちゃん、なぎさちゃん、たつちゃん、くうたちゃん、りきちゃん、りきちゃん、りきちゃん……」  
「……今度は私の番なんだ聞いて、怖くなって逃げたんです。けど……村人の皆に『自分だけ逃げるのか』『あの子達のことを考える』と責められました。……だから、諦めて生け贄になることにしました。最初は諦めていたはずなのに、お堂のいる間に不安がどんどん大きくなりました。そして、あなたに解放された時、思わず逃げ出しました。……ずるいですよ、みんなが生け贄になったのに、逃げ出すなんて」

自分を責めながら涙を流すひな。

すると、ひなの頭を咲夜が優しく撫でる。

ひなはハッと気づいた。

「……死ぬのが、怖いのは当たり前よ。もちろん、死んでいった友達だって、同じ気持ちよ」

「……咲夜さん……」

「死んで償うなんて、あつてはならないわ。生きて、生き続けることこそが、死んでいった友達の為よ」

咲夜は優しく、ひなに死んで償うのではなく、生きることを進める。

「……けど、生け贄がいなければ、土地神様が」

「子供を喰って生き長らえる土地神なんていないわ。多分、土地神の名を騙る妖怪よ」

「よ、妖怪？」

ひなは『妖怪』と聞いて驚いた。

「土地から妙な妖気が感じるの」

咲夜は地を手で触れながら、そう感じた。

「い、いつから、そんなことを？」

「此処へ来るときから、足で感じたのよ」

咲夜は己の体を通じて、妖気を感じ取っていたのだ。

「土地に妖気を送って、作物を育たないようにしたようね」

「そ、そんな……」

妖気など知らないひなだが、『作物を育たないようにした』ということを知って、言葉を失い、項垂れた。

「……許せない……。何の罪の無い村人から子供を奪うなんて」

咲夜は静かに怒りながら拳を強く握る。

「……咲夜さん……」

ひなはそんな咲夜を静かに見て、『本当に良い人』だと確信した。

咲夜はすぐさま村長の家に戻った。

村長や村人達。そして、はたと天は突然戻ってきた咲夜を見る。

「村長、その頼みごとを引き受けるわ」

こうして、咲夜は頼みごとを引き受けた。

翌日の朝。馬に乗った1人の侍が数人の家来を引き連れてやって来た。

「村長！ 村長はいるか！」

村長を呼び出した。

村長は慌てて家から飛び出る。

「これは御領主様！」

侍を『御領主』と呼んだ。

「村長。何故、お堂に生け贄の子供を供えなかった？」

御領主の問いに、村長は困ってしまう。

「答える！」

ひなは自分の家から、村長の様子を伺った。

「殿、子供が！」

家来の1人がひなに気付いた。

「よし、あの子供を捕らえろ！」

「はっ！」

家来達がひなを捕らえようと、ひなのところへ走って行く。

「ああっ、お待ちくだされ！」

村長は止めようとするが、家来達は聞かない。

すると、ひなの前に咲夜が立ち塞がる。

「な、なんだ？」

「邪魔をするな！」

家来達は持っている棒で殴ろうとすると、咲夜は棒を同時に両手で掴んでしまう。

「ふん！」

「ぐわっ！」

そのまま、頭同士をぶつけて気絶させた。

後から、はなと天が出てくる。

「咲夜、力持ちだね！」

「こいつら、死んじゃった？」

「気絶させただけよ」

御領主と村長は咲夜の強さに驚いた。

「な、何者だ！？」

「見ての通りの巫女よ」

咲夜達は御領主に近づく。

「あんたも、この村の事情を知っているようね」

「そうだ。だから、生け贄を連れていこうと此処へやって来た」  
「あなた、御領主様なんだろう？ 御領主の力で土地神様をなんとかしなよ」

はなは呆れながら言った。

「……言つのもなんだが、わしの力でもどうにも出来ぬ……」  
と自信なく答える。

すると、はなはあることを思い付いた。

「御領主様にならできるよ」  
「何？」

「この巫女の咲夜様に頼めば、ちよつちよいのちよいで解決だよ」  
咲夜の手を叩いて、自慢する。

「何を馬鹿な」

「いや、この咲夜さんは、大百足を退治しました」  
「何？」

御領主はじつくりと咲夜達を見た。  
特にはなと天を見て、考えた。

「……良かろう、お主に任せてみよう」

「その代わりに、報酬は貰うよ」  
報酬をせびるはなを見て、咲夜は呆れる。  
考えた御領主は咲夜に問題を任せることにした。

「うわっ」

咲夜達は御領主の屋敷を見て驚いた。

見た目は貧しく、空の暗雲により屋敷が不気味さを増していた。  
まさに幽霊屋敷だった。

「……妖気が強く感じる……」  
屋敷から強い妖気を感じる咲夜。

「さっ、入れ」

咲夜達は屋敷へ入っていた。

「はな、天、気を引きしめるのよ」

はなと天は頷く。

果たして咲夜達はどのようなのだろうか？

次回へ続く。

怪しき屋敷への招き（後書き）

咲夜の活躍をご期待を。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4965t/>

---

対魔拳法伝説 破邪の拳

2011年10月12日22時01分発行